JICA海外協力隊 サモア派遣 50周年

JICAサモア事業の歩み

独立行政法人　国際協力機構
サモア支所

JICAサモア支所長　挨拶

青年海外協力隊派遣は1965年に始まり、サモアは1972年に世界で15番目の派遣国、大洋州では最初の派遣国となりました。サモアの初代隊員は1972年12月に派遣され、公共事業省に配属となり、土木施工の専門性を活かして、火力発電所の建設プロジェクトに協力しました。

1972年、独立後わずか10年の若いサモア国に、初代隊員は熱い情熱を持って乗り込みました。幸い、この初代隊員の奮闘と真摯な活動が高く評価され、その後他省庁からの派遣要請につながりました。それ以来、2022年で50周年を迎えます。50年間に渡って、協力隊員を受け入れ、活動をあたたかく支援して頂いたサモア国とすべての国民の皆様に対して心より感謝申し上げます。そして、50年間の協力隊員及びその他関係者による、ご尽力と熱き情熱に対して、深く感謝申し上げます。

サモアへの隊員派遣は途切れることなく続き、これまでに累計676名に達しています。派遣分野は教育、保健、建設、環境、IT、スポーツ、文化等々、非常に広い分野にわたっております。この国のすみずみで、長期間に渡ってしっかりとした活動を展開してきております。その結果、サモアの人々と政府から高い評価と信頼を頂いております。

JICA海外協力隊の派遣の目的は、相手国の経済社会の発展、友好親善・相互理解の深化、経験の社会還元です。これまでのサモア隊員の活躍は、サモアで受入れられ、信頼と絆につながり、そしてサモアの今日の発展に貢献しました。これは、隊員がサモア人との同一目線に立ち、現場で汗を流して協働した成果だと思います。また、隊員は活動後に日本に戻り、サモアで培った経験をしっかりと日本に還元して頂いています。

今、この50年間を想起し、人とともに働くこと、学びあうこと、そして実践することがどれほど大切かを、再び噛みしめて、今後のサモアの発展に尽くしていきたいと思っています。今後、私たちは協力隊事業を通して、サモアと日本そして世界をより良くしていくために、最大限尽くしていきたいと考えております。今後とも、サモアの人々とともに考えて、ともに働いて、チャレンジを続けていくことができると確信しています。

独立行政法人　国際協力機構
サモア支所長
星野明彦

サモア独立国フィアメ・ナオミ・マタアファ首相からの祝辞

新型コロナウイルスの蔓延前には、学校、スポーツ施設、リサイクル施設、病院、研究、産業、政府省庁で、さらには首都アピアから遠く離れた地方のコミュニティでも、JICA海外協力隊の活躍を見てきました。これは、JICA海外協力隊がサモアで築き上げてきた多大な功績の証です。新型コロナウイルスの世界中の蔓延の影響で、JICAボランティア事業は一時中断を強いられていますが、早く再開することを願っています。

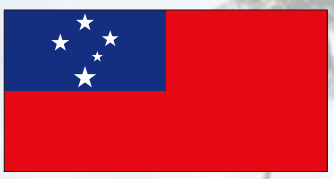
サモアは、大洋州地域で初めて青年海外協力隊を受け入れた国です。2022年は、JICA海外協力隊のサモア派遣50周年を迎えます。1972年の協力隊員派遣開始以来、700人近くの協力隊員がサモアで貢献してきました。協力隊員は、現地の人々と共に生活し、異なる言語、異なる文化慣習も習得しています。サモアの人々もまた、日本の文化・慣習について学ぶことで恩恵を受けていることは間違いありません。多くの協力隊員がサモアの人々と築き上げた、人と人とのつながりは、非常に価値のある成果であり、2年の隊員任期が終了した後も、ずっと残り続けていくでしょう。

協力隊員の派遣人数が増加していることは、サモアがJICAボランティア事業を評価していることの表れです。協力隊は、サモアの成長に必要不可欠な人材育成に大きな役割を果たしています。

現在、私たちは新型コロナウイルスの世界的な蔓延によって、悪化する無数の課題に直面しており、これからの協力隊員の活動は、これまで以上に重要になるでしょう。協力隊員のさらなる活躍を楽しみに、近い将来、サモアへ協力隊員がまた戻ってくることを願っています。
JICAボランティア事業の功績、JICAサモア支所が現地のパートナー機関と密に連携して、ボランティア事業を推進してきたことをここに称賛します。
協力隊のサモア派遣50周年を迎えられ、心よりご祝福申し上げます。

サモア独立国首相
フィアメ・ナオミ・マタアファ

年 表



サモア

1920年　国際連盟委任統治

1918年　スペイン風邪大流行
（サモア人口22%死亡）

1899年　ドイツが西サモア（現サモア独立国）を領有

1722年　オランダ人探検家
ヤーコブ・ロッヘフェーンサモア確認

1890年　R・L・スティーブンソン、サモア移住

1700年代	1800年代	1900年代

1701年　赤穂事件

1853年　黒船（米国4艦隊）来航

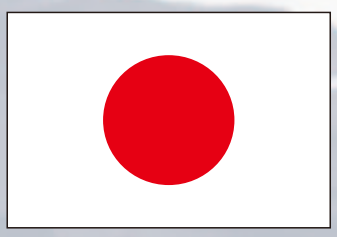
1867年　大政奉還

1889年　大日本帝国憲法発布

1923年　関東大震災

1945年　第二次世界大戦終結

日本



2019年　パシフィックゲーム開催

2019年　ラグビー WC日本大会　サモア国参加

2018年　PALM8サモア首相・共同議長

2014年　後発開発途上国（LDC）を卒業

2012年　サイクロンエヴァン上陸

2012年　WTO加盟

2011年　日付変更線の西側に移動

2009年　サモア諸島沖地震津波

2009年　在京サモア大使館開設

1997年　サモア独立国に国名変更

1997年　PALM参加（第一回太平洋・島サミット）

1995年　サモア代表ラグビー WCベスト8

1991年　サモア代表ラグビー WCベスト8

1981年　南太平洋フォーラム参加（2010年に太平洋諸島フォーラムと改称）

1980年　在京西サモア名誉総領事館開設

1970年　英連邦に加盟

1962年　サモア独立（当時の国名：西サモア）

2000年代

1965年　青年海外協力隊発足

1968年　JICA研修事業開始（サモアから日本へ初代研修員2名派遣）

1972年　青年海外協力隊サモア国派遣開始

1973年　西サモアー日本国交樹立

1992年　シニア海外協力隊サモア国派遣開始

1995年　阪神淡路大震災

2003年　秋篠宮同妃両殿下サモア国御訪問

2006年　技術協力プロジェクト開始（技術職業教育訓練強化計画）

2007年　有償資金協力事業開始（電力セクター拡張事業）

2011年　東日本大震災

2012年　緊急援助物資供与（サイクロンエヴァン）

2013年　在サモア日本国大使館開設

2015年　JICA海外協力隊サモア国派遣600名突破

2015年　青年海外協力隊発足50周年

2018年　無償資金協力事業（アピア港安全向上計画完成）

2019年　国際緊急援助隊・感染症対策チーム派遣

2020年　無償資金協力事業（ヴァイシガノ橋架け替え完成）

2022年　青年海外協力隊サモア国派遣50周年

JICAサモア　主な事業と隊員派遣実績図

JICAスキーム

- T ── 研修
- TC ── 技術協力
- GTC ── 草の根技術協力
- GA ── 無償資金協力
- L ── 円借款
- JDR ── 緊急援助支援
- ★ ── ボランティア配置先
- ● ── プロジェクトサイト

教育分野

- T 職業訓練の運営・管理と質的強化
- T 基礎教育の質、内部効率性、格差に焦点をあてた教育行財政
- GTC 初等理数科教育における問題解決型授業の展開（2014−2017）2
- T 初等理数科教授法
- GA TC 職業訓練学校拡張計画・技術職業教育訓練強化計画プロジェクト（2002−2006）

サバイイ島

保健分野

- TC 大洋州広域フィラリア対策プロジェクト（2018−2023）
- T 妊産婦の健康改善（母子保健のための遠隔医療を含む）
- T 食品安全政策立案・管理セミナー
- TC 太平洋地域予防接種体制整備プロジェクトⅠ（2005−2010）、Ⅱ（2011−2016）
- T 生活習慣病予防対策
- T 地域保健システム強化による感染症対策
- GA 医療器材支援

防災・災害対策・緊急援助分野

- T 消防・防災
- T インフラ（河川・道路・港湾）における災害対策
- JDR 感染症対策チーム派遣（麻しん流行）（2019）
- JDR 緊急援助支援（サイクロンエヴァン）（2013）
- JDR 緊急援助支援（津波被害）（2009）
- T 救急救助技術

水分野

- T 水道管理行政及び水道事業経営
- TC 沖縄連携によるサモア水道公社維持管理能力強化プロジェクト(CEPSO)(2014−2019)
- GA 都市水道改善計画(2014−2016) 3
- T サモア水道公社能力強化
- T 大洋州 島嶼における水資源管理・水道事業運営
- GTC 宮古島モデル サモア水道事業運営支援(2010−2013)

環境・廃棄物管理分野

- T 国家測量事業計画・管理
- T 廃棄物管理技術
- TC 気候変動に対する強靭性向上のための大洋州人材能力向上プロジェクト(2019−2023)
- GA 太平洋気候変動センター建造計画(2018−2019)
- TC T 太平洋地域廃棄物管理改善支援プロジェクト(2011−2022)
- TC T 太平洋廃棄物管理プロジェクト、個別専門家、廃棄物処分場整備(2000−2010)
- GA 森林保全計画(2010−2013)
- TC 国立公園・自然保護区の管理能力向上支援プロジェクト(2007−2010) 5

経済・インフラ分野

- GA ヴァイシガノ橋架け替え計画(2018−2020) 1
- T 橋梁維持管理
- T 社会基盤整備における事業管理
- GA アピア港安全向上計画(2016−2018)
- T 港湾開発・計画
- GA 貧困削減戦略支援(2012−2016)
- T 配電網整備
- T 水力開発の促進
- GA TC 気象観測/災害対策向上計画(2009−2013)
- GA 島嶼間フェリーボート建造(2008−2010)
- L 電力セクター拡張事業(2008−2017) 4
- GA アピア港整備計画(2000−2003)
- GA アピア港タグボート建造(2000)

JICAボランティア事業

事業概要と目的

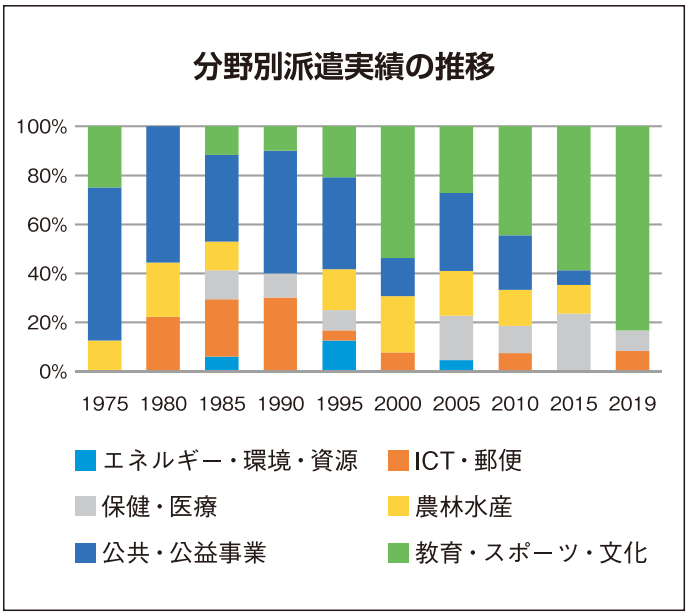
国際協力の志を持った方々を開発途上国に派遣し、現地の人々とともに生活し、異なる文化・習慣に溶け込みながら、草の根レベルで途上国が抱える課題の解決に貢献する事業です。

事業の主な目的は、(1)開発途上国の経済・社会の発展、復興への寄与、(2)異文化社会における相互理解の深化と共生、(3)ボランティア経験の社会還元です。途上国支援として(1)の開発に向けた貢献に加えて、(2)の途上国との草の根レベルの友好関係づくりや(3)の社会還元が加わっている点が「国民参加型」事業と呼ばれる所以です。

事業実績

1972年12月、大洋州地域で初めての青年海外協力隊員(以下、協力隊員)として当時サモア独立国に国名を変更する前の西サモアに土木施工を専門とする協力隊員が派遣され、火力発電所の建設プロジェクトに従事、西サモア国民への安定した電力の供給に大きく貢献しました。火力発電所建設プロジェクトを担当した公共事業省大臣が協力隊員の真摯な活動姿勢を評価し、その後の他の省庁やNGO団体からの数多くの協力隊派遣要請につながっています。

派遣開始当初は、公共事業や農業水産分野の隊員を中心に派遣されていましたが、1980年、当時のサモア首相が公賓として来日した際に日本の教育制度に大きな感銘を受け、教育分野の協力隊員の派遣が開始され、現在、サモアで一番大きな派遣規模になっています。



田中智子さん　青年海外協力隊
2018年～2020年
小学校教育
マタウツ・ファレラタイ小学校

藤原岬さん　青年海外協力隊
2014年～2016年
小学校教育
サレアウラ小学校

坂本賢二さん　シニア海外協力隊
2014年～2016年
科学
科学研究機構(SROS)

成果と課題

1970年代の派遣当初は少数精鋭の派遣でしたが、西サモア政府から隊員活動が高く評価され現在は常時20人から30人規模の派遣が行われています。サモアの人口は約20万人（2021年7月時点）であることから、人口一人当たりの協力隊員の派遣数は、他の派遣国と比較しても高い水準になります。これはサモア政府からの協力隊員派遣のニーズの高さと協力隊員の活動がサモアに受け入れられ、サモア政府と国民から高く評価されている証拠と言えます。

派遣開始当初の公共事業などのインフラや農業水産分野を中心とした隊員を派遣していましたが、近年は、サモアの隊員は教育や産業分野における人材育成、身体の障害を持つ人や特別な支援を必要とする人たちへの弱者支援、スポーツなどを通した青少年の育成などソフト面での協力も進めています。サモアのJICAボランティア事業は、サモアの次の50年を見据えた取り組みをサモアの人たちと一緒に取り組んでいきます。

山口大和さん　青年海外協力隊
2016年～2018年
理数科教師
パララウア中高等学校

元栄由紀子さん　青年海外協力隊
2019年～2020年
歯科衛生士
サモア国立病院歯科

職種名称	人数
理数科教師	62
小学校教育	40
自動車整備	38
土木	28
野菜	26
コンピュータ技術	24
技術科教師	22
電話線路	22
建築	20
歯科衛生士	19
獣医・衛生	18
臨床検査技師	16
家政	14
電気・電子機器	13
船舶機関	12
PCインストラクター	11
視聴覚教育	11
障害児・者支援	11
無線通信機	11
木工	10
柔道	9
日本語教育	9
船員教育	8
体育	8
在庫管理	8
冷凍機器・空調	7
生態調査	7
保健師	7
看護師	7
コミュニティ開発	7
溶接	6
環境教育	6
工作機械	6
公衆衛生	6
道路施行	6
自動車板金	6

職種名称	人数
電力	6
学校運営	6
養殖	6
漁業生産	6
音楽	6
建設機械	5
幼稚園教諭	5
プログラムオフィサー	4
電子工学	4
測量	4
科学	4
美術	4
水産開発	4
作業療法士	3
サッカー	3
感染症対策	3
学芸員	3
家畜飼育	3
果樹	3
テニス	3
水資源開発	3
きのこ栽培	3
観光業	3
気象	3
農業技術	3
植物学	3
AV機器	3
都市衛生	2
陸上競技	2
経営管理	2
理学療法士	2
経済・市場調査	2
助産師	2
水泳	2
その他	15
累計	676

Ms. Sharon Suhren
代表

配属先の声：フィアマラマラマ特別支援学校

フィアマラマラマ特別支援学校には、10年以上、JICA海外協力隊が派遣され、様々な支援を受けています。私たちの学校は、隊員の皆さんの知識や技術に支えられ、その取り組みは学校の職員の技術向上にも大きく貢献しています。松井恵隊員からはたくさんの作業療法技術を支援と共に、日本大使館の草の根無償資金協力による施設拡充のデザイン案作成に協力してもらいました。また、松井美智子隊員はたくさんの知識を持っていて、また、他の協力隊員と開催した日本文化紹介イベントは生徒たちにとって素晴らしい交流イベントになりました。その後、宮﨑博隊員が始めた生徒への職業技術訓練は、その後、派遣された林孝一隊員に引き継がれ、今でも現地教職員によって継続して取り組んでいるプログラムとなっています。

私たちはJICA海外協力隊からたくさんの喜びを頂きました。あらためまして、JICA海外協力隊サモア派遣50周年、おめでとうございます。

宮﨑博さん　シニア海外ボランティア
2016年～2018年
障害児・者支援
フィアマラマラマ特別支援学校

林孝一さん　シニア海外ボランティア
2018年～2020年
障害児・者支援
フィアマラマラマ特別支援学校

一盛和世さん　青年海外協力隊
1977年～1979年
公衆衛生
保健省

青年海外協力隊OBの声

私のこれまでの人生を振り返るとキーワードは3つです。“フィラリア対策”、“蚊”、そして“太平洋”です。1977年2月、サモアに初めての女性隊員として参加しました。それまでに学んできた、熱帯病や蚊の対策の現場で仕事をしたいという動機でした。2年間、サモア人スタッフと一緒に毎日、村々を回り、蚊を集め、フィラリアの患者さんと接して、驚くことばかり、多くのことを学び、扉が開いた気がしました。その後、本格的に熱帯病を学び、1992年6月に今度は世界保健機関の職員として、再びサモアでフィラリア対策に関わりました。そこから、さらにヴァヌアツ、フィジー、太平洋全域に対策を広げ、太平洋リンパ系フィラリア症制圧計画(PacELF)を立ち上げました. そして、その太平洋での経験と成果をもとに、本部ジュネーブで世界リンパ系フィラリア症制圧計画を担当しました。今は日本に戻り、熱帯病のこと、蚊のこと、そして太平洋の島国のことを日本の方々と考え、想い、語る場を提供できたらと務めています。

私のキャリアはJICAのボランティアから始まりました。そして、私にとってサモアは世界へ向かっての出発点でした。心より感謝です。50年にわたるJICAサモア海外協力隊事業、おめでとうございます。

1978年
マノノのファミリーと教会へ

1995年
サモア政府フィラリア制圧キャンペーン

2005年
フィラリア症象皮病の患者さんの足を洗う

2018年
WHO会議でサモアスタッフと再会

トピック記事

サモア国民に愛されている天気予報・防災スマホアプリ

毎年、南太平洋には大きなサイクロンが発生しています。このサイクロンは、数年毎にサモアにも到来して国内に甚大な被害を及ぼしています。また、2009年にはサモア近海でマグニチュード8を超える地震が発生して、サモアウポル島南部に4mを超える津波が到達して、複数の村々が壊滅的な被害を受けました。このようにサモアは絶えず自然災害の脅威に脅かされた環境と地域に位置しています。サモア気象局に派遣された隊員は、サモアの自然災害の発生をいち早くサモア国民に伝える手段として、同局の同僚と共同して天気予報・防災スマホアプリSamoa Weatherを開発しました。このアプリはサモアの天候、気圧配置図、近海で発生した地震やサイクロンの発生状況を現在も毎日更新されています。このスマホアプリはサモア国民だけでなくサモアに在住する外国人の多くも利用しており、サモアの防災予防に大きく貢献しています。

天気予報・防災アプリ
「Samoa Weather」

松村剛志さん　青年海外協力隊
2016年～2018年
コンピュータ技術
気象局

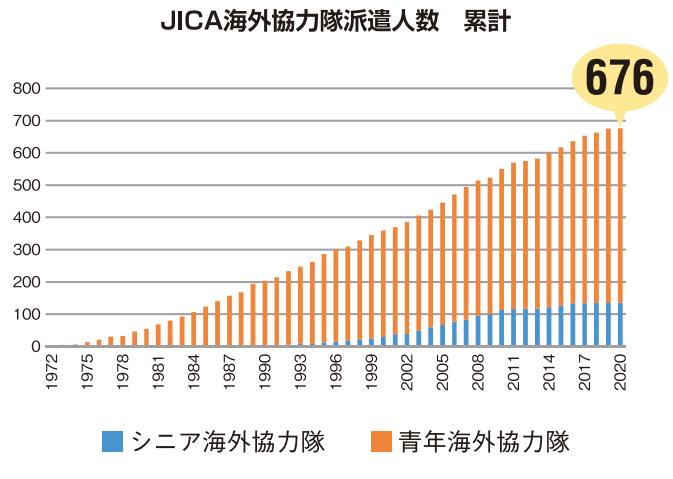
新井教之さん　青年海外協力隊
2016年～2018年
小学校教育
レウルモエガ小学校

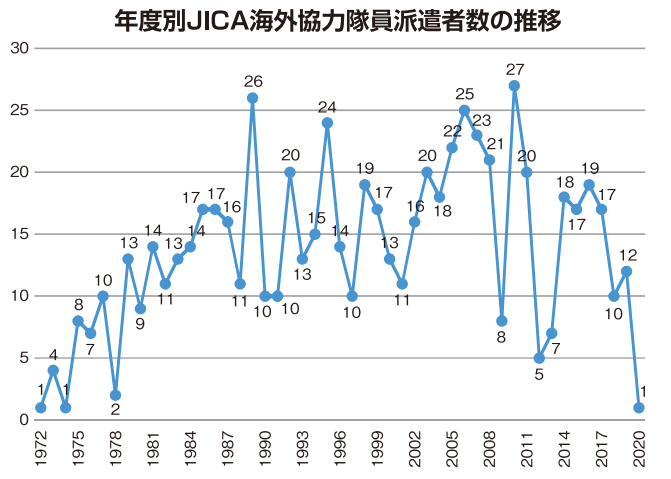
笹島美沙希さん　青年海外協力隊
2018年～2020年
理学療法士
ロト・タウマファイ・ソサエティ NGO

池下昌弘さん　青年海外協力隊
2014年～2016年
小学校教育
イバ小学校

事業略歴

年月	出来事
1971年　9月	青年海外協力隊サモア派遣取決め締結
1972年12月	青年海外協力隊サモア派遣開始
1992年12月	青年海外協力隊サモア派遣20周年　シニア海外ボランティア派遣開始
1996年12月	JICA海外協力隊員サモア派遣累計300人達成
2009年10月	シニア海外協力隊サモア派遣累計100人達成
2015年　7月	JICA海外協力隊サモア派遣累計600人達成
2015年12月	JICA海外協力隊派遣開始50周年（ラオス、カンボジア、マレーシア、フィリピン）
2022年12月	JICA海外協力隊サモア派遣50周年　JICA海外協力隊サモア派遣累計676名





（左から）田中智子さん、原奈央さん、中井彰彦さん
青年海外協力隊
小学校教育

上林航平さん　青年海外協力隊
2018年～2020年
柔道
サモア柔道協会

柏山麗さん　青年海外協力隊
2018年～2020年
獣医・衛生
サモア動物愛護協会

技術協力事業

事業概要と目的

開発途上国のニーズは、これまでの農業開発や保健医療の改善、給水などの社会基盤の整備に加え、最近は気候変動への対応、市場経済化や法整備に対する支援、アフガニスタンやスーダンなどにみられる平和構築・復興支援など従来にも増して、多様化・多面化しています。これらの中には、資金協力によって施設や設備を整備して状況を改善できるものもあれば、開発途上国の自立発展や開発効果の持続性を確保するため、開発途上国自らの課題解決能力を向上させることに主眼を置いた協力が必要なものもあります。

本事業は、開発途上国の課題解決能力と主体性の向上を促進するため、専門家の派遣、必要な機材の供与、人材の日本での研修などを通じて、開発途上国の経済・社会の発展に必要な人材育成、研究開発、技術普及、制度構築を支援する取り組みです。

気候変動に対する強靭性向上のための大洋州人材能力向上プロジェクトの活動

事業実績

大洋州地域の特徴から次の3つの点から実績が挙げられます。

❶サモアにおける技術協力
❷サモアをベースとした広域技術協力
❸サモア以外をベースとした広域技術協力

大洋州地域廃棄物管理改善支援プロジェクトの活動

❶サモアにおける技術協力

●技術協力プロジェクト

2004年の「廃棄物対策」プロジェクトを皮切りに、「技術職業教育訓練強化(2006年開始)」、「沖縄連携によるサモア水道公社維持管理能力強化(2014年開始)」等、6案件を実施しています。

●専門家派遣

1990年代から派遣を開始し、「廃棄物対策」「大洋州気候変動アドバイザー」等7案件を実施しています。

❷サモアをベースとした広域技術協力

「大洋州地域廃棄物管理改善支援」を2011年から2022年まで実施、また、2019年からは「気候変動に対する強靭性向上のための大洋州人材能力向上」を開始しています。

❸サモア以外をベースとした広域技術協力

主にフィジーを拠点として実施しており、2000年以降に「大洋州気象人材育成能力強化」「太平洋地域ハイブリッド発電システム導入」「生活習慣病対策」「大洋州広域フィラリア対策」等を実施しています。

沖縄連携によるサモア水道公社維持管理能力強化プロジェクトの活動

成果と課題

沖縄連携によるサモア水道公社維持管理能力強化プロジェクト

本プロジェクトのパートナーであるサモア水道公社の水道事業サービスは、全人口の85%(2020 年)をカバーする組織です。

首都アピアでは、漏水等による高い無収水率が課題となっており、最大の給水区であるアラオア給水区(給水人口約1.8万人)では、プロジェクト開始時点で給水量の68%が無収水でした。その他にも、供給水の水質の課題、低い料金徴収率、無収水対策など複雑な課題が悪循環となり、水道公社の経営状況は良好ではありませんでした。

これらの課題に対応すべく、JICAはサモア同様の島特有の知見を有する沖縄県内の自治体と連携し、改題解決のプロジェクトを開始しました。草の根技術協力、課題別研修、無償資金協力などの複数の事業をミックスし、本プロジェクトにおいては、管路施工・漏水修理能力、配水管理能力、漏水探知能力、水質管理体制、浄水場運転管理能力の5分野において能力強化を行いました。

その結果、対象地区であったアラオア給水区の無収水率は68%から36%(2019年)に大幅に改善しました。アピアの7つの浄水場でも飲料水水質基準も100%達成できるようになり、水道水からの大腸菌の検出もなくなりました。

さらには、水道公社の収支も改善することになり、さらなるサービス向上の実施につながりました。プロジェクトでは持続性を担保するため標準作業手順書を作成し内部研修を実施し、水道公社スタッフの技術向上、育成にも寄与しています。現在、水道公社本部勤務のスタッフや浄水場管理をしているスタッフなどは、プロジェクトに関わった人材で、サモアの水道の品質を守り、人々の生活を守るため日夜勤務してくれています。

Mr. Semi Lesa
市街課無収水・漏水探知班
技術エンジニア

プロジェクトパートナーの声 :サモア水道公社

沖縄の専門家と共に働き、教授された知識を実際の現場で活用することが出来ています。また、沖縄での研修では、給水システムの知識や水処理プロセス、浄水場プロセス、パイプラインネットワークの運用・保守、資産管理、工具・機器のトレーニング、請求・債権回収、無収水・漏水検知などの分野を詳細に学べ、サモアでの現場での仕事に活用できました。

プロジェクトの成果の一つは、サモアの主要な浄水場の一つであるアラオア給水地区の無収水の割合を減らすことでした。プロジェクト開始時点では68%と高く、当社にとって収益の大きな損失となっていました。プロジェクト終了時の目標では35%に設定されていましたが、29%まで削減することに成功しました。

私は、プロジェクトを通して、親しい友人となった専門家から学んだすべての専門知識に感謝しています。現在では、専門的なアドバイスや助言が必要なときは、常に連絡を取り合え、交流が続いています。

実施年	実施事業
2000-2010	廃棄物対策
2005-2010	大洋州地域予防接種事業強化(広域)
2006-2008	技術職業教育訓練強化計画
2007-2010	国立公園・自然保護区の管理能力向上支援
2011-2022	大洋州地域廃棄物管理改善支援(2023年～フェーズ3開始予定)
2014-2019	沖縄連携によるサモア水道公社維持管理能力強化(2022年～フェーズ2開始予定)
2018-2023	大洋州広域フィラリア対策(広域)
2019-2023	気候変動に対する強靭性向上のための大洋州人材能力向上

研修事業

事業概要

開発途上国から、主に当該分野の開発の中核を担う人材を研修員として日本に招き、それぞれの国が必要とする知識や技術に関する研修を行う「本邦研修」、日本以外の国で開催する「在外研修」があります。

本邦研修は、日本側から途上国に提案し要請を得て実施する「課題別研修」、途上国個別の具体的な要請に基づき実施する「国別研修」。そして次世代を担う若手リーダーの育成に焦点を絞った「青年研修」の三本柱で構成されています。2015年より、本邦における研修事業の英訳をKnowledge Co-Creation Program（KCCP）としています。

在外研修（オンライン）の様子（2021年）

事業実績

日本の社会は、日本の既存文化を踏まえつつ、外来の知識や技術を取捨選択し応用することで独自の発展を遂げてきました。こうした日本ならではの経験を伝えるために、開発途上国の関係者に日本に来てもらい、実際に日本の社会や組織に身を置いて学んでもらう技術協力が、本邦研修です。本邦研修では毎年約1万人の研修員を受け入れています。JICAは研修が始まった1954年から、世界各国の研修員を受け入れ2019年度までに、378,000以上の研修員を派遣しています。

サモアにおける研修事業は、1968年に初代研修員2名から開始され、これまで累計で1051名（2021年5月現在）を派遣しています。開始当初は、毎年数名の派遣でしたが、1988年には13名と初めて二桁の派遣規模となり、1994年には20名を超え、2000年には30名を超える派遣規模に拡大し、現在に至っています。

研修の様子

成果と課題

研修事業には、長期間の留学や短期間の研修、また青年研修など様々なニーズに合わせて、さらに日本以外の国での研修も実施されており、研修員にあったベストマッチを心掛けて様々な研修を実施しています。また、研修内容はサモア政府の要請に基づきアレンジし、ノウハウや知見の強みを持つ地方の自治体・企業等で実施されます。2021年のサモアの研修分野は次のとおりとなっています。

教育（初等・職業訓練）、保健（感染症）、ガバナンス、障害者支援、農村開発（ブランディング、女性能力向上）、民間セクター支援（中小企業支援・観光）、ICT、エネルギー（再生可能エネルギー）、運輸交通（港湾、環境防災）、都市・地域開発（開発政策・測量管理）、廃棄物管理、気候変動対策、防災、水道管理関係で27コースを予定しています。

このように、JICAがサモアで実施している事業の関係者も含めて、サモアにとって効率的な人材育成となるよう研修事業を行っています。

2020年後半からは世界的なCOVID19パンデミックの影響で、日本での渡航が難しくなり、オンラインでも研修を余儀なくされていますが、サモアからは積極的な参加があります。

研修生の活動・取り組み

研修では、帰国後に研修期間で習ったことを、自分の仕事にどう活用していくかを、研修終盤にその計画をたてることになっています。JICA東北が実施した「スポーツを通じた障害者の社会参加促進」研修に2019年に参加したPuaseiseiさんは、障害者センターに勤める先生です。研修中には、研修で習得した知識を活用し、障害者が出来る卓球バレーのサモアでの導入・普及を計画し、生徒たちが楽しく学校生活を送れることや、いつかは卓球バレーの大会を開きたいと希望を持ちサモアに帰国しました。帰国後は、計画実現のため卓球バレー用具(卓球台、ボール等)の調達が可能か、普及する下地があるのか等、実現にむけて関係者と議論を重ね、2021年2月に卓球バレーの導入を実現することが出来ました(写真)。

さらには、この取組みを帰国研修員の同窓会で報告した結果、研修から帰国後の活動を充実する重要性が議論され、新たな取り組みを定期的に計画し、サモア社会に貢献すべく前向きな動きに繋がっています。

卓球バレー台を囲む学校関係者

Puaseisei さん(中央)

Ms. Da Young Mary Magdalene Tuuau
2019年「配電網整備」研修
(JICA沖縄)参加

研修生の声 :サモア電力公社

日本研修では、途上国の電力問題、特に技術的損失や過負荷の原因となる不十分で不安定な配電設備について適切な解決策を提供してくれました。また、経営悪化問題を回避するための方策として、メーターシステムの点検や料金徴収方法、メンテナンスの重要さを学びました。研修は非常に有益で、サモアの電力ネットワークを支援するための技術と経験を得ることができました。帰国後は、研修で学んだことを活用して、サモアの電力網の計画、設計、運用、保守等に貢献し、人々から信頼性を高めることに貢献したいです。

研修実績

年度	課題別研修コース数	青年研修コース数	SDGsグローバルリーダー・コース派遣者数
2021	27	2	5
2020	28	3	5
2019	26	3	1
2018	34	3	1
2017	35	3	1
2016	33	3	0

無償資金協力

無償資金協力は、開発途上国に資金を贈与し、開発途上国が経済社会開発のために必要な施設を整備したり、資機材を調達したりすることを支援する形態の資金協力です。支援内容としては、道路・橋や港湾などの社会基盤の整備、給水施設の整備、教育施設の整備、病院の建設、環境保全を推進するための設備など、開発途上国の国づくりの基礎となる活動を支援しています。実施のサイクルですが、協力準備調査、要請、審査、閣議決定を経て、日本と被援助国との間の交換公文締結となります。その後、贈与契約の締結を経て、事業が開始されます。事業は、相手国政府が実施主体となって実施され、JICAは相手国のオーナーシップを尊重しながら、プロジェクトの適正かつ円滑な実施を確保するためにプロジェクトの進捗を確認し、相手国政府などの関係者に助言を行います。

サモアにおける事業例を以下紹介します。

(1)ヴァイシガノ橋架け替え計画

（贈与契約締結2017年7月、供与額18.06億円）

サモアにいて頻発する自然災害に強い道路・橋梁インフラの強化を目的としています。本協力では、アピア市内の主要幹線道路上に位置するヴァイシガノ橋を架け替え、これにより、安全で災害に強い幹線道路が確保され、環境に配慮した持続的な経済成長に寄与しています。

完成したヴァイシガノ橋

以前のヴァイシガノ橋

工事の様子

Ms. Galumalemana
Ta'atialeoitiiti Agnes Tutuvanu
CEO

無償資金協力パートナーの声：サモア陸運局

サモア陸運局とJICAが建設したヴァイシガノ橋は、サモアのランドマークの一つとなり、埠頭から市内中心部への陸上輸送の効率を大幅に改善しました。設計、建設、一つ一つのプロセスを通じて、JICAからは多くを学び、サモアの陸運局と政府機関、それからコンサルタント会社や道路建設会社のスキルも強化されました。

これらは、当プロジェクト開始当初から実現したいと願っていた目標であり、サモアの人々が自立して、大規模インフラを構築するために必要な経験、スキルを持つことが出来たことは大変嬉しく思います。世界中がCOVID-19の影響を受けて、サモアの観光産業も冷え切っていますが、ヴァイシガノ橋建設プロジェクトは、雇用機会も提供でき、サモア経済に寄与しました。2020年8月には、当時のサモア トゥイラエパ首相と在サモア寺澤大使の元、公式開通式が開催され、ヴァイシガノ橋の完成は、まさに、サモア政府と日本政府が共に歩み、築き上げたパートナーシップの架け橋となりました。

(2)アピア港安全向上計画

（贈与契約締結2015年6月、供与額34.77億円）

サモア国は国民生活、経済活動ともに海上輸送に大きく依存しています。アピア港は、同国唯一の国際港湾であり、外国貿易の大部分を取り扱うもっとも重要な港湾ですが、船舶の大型化を背景として、船舶の入出港、離着桟および係留時の安全性が脅かされている状況にありました。本協力では、岸壁の延長およびコンテナヤードの補修をメインとした港湾施設の改修やタグボートの修復を支援し、安全で効率的な港湾機能の確保を図りました。

プロジェクトの主な成果:

●停泊エリアを137m延長し、全長302mに改修
●1,300㎡のコンテナ保管庫の改修
●1,100㎡の桟橋の改修
●導灯の設置、航路標識灯をLEDに交換
●小型船2船の修復

完成したアピア港

大型客船も停泊可能となった

工事の様子

Mr. Sooalo Kuresa Sooalo
CEO

無償資金協力パートナーの声：サモア港湾局

アピア港安全向上計画は、サモアと友好的な関係にあるパートナー、JICAを通じた資金供与のもとで成し遂げることが出来ました。

アピア港は、大型船の収容能力が大幅に向上し、2隻のコンテナ船の同時停泊を初めて成し遂げ、コンテナの保管庫も拡大出来ました。さらに、このプロジェクトでは、航路標識灯、ヴァエア山の導灯の交換、小型船2船の修復も行いました。本プロジェクトは、サモア政府と日本政府との緊密な関係の証です。

本プロジェクトは、サモア港湾局の能力強化、サービス向上、さらには同局の財務状況の向上に大きな影響をもたらしました。本プロジェクトの完成は、サモア政府の開発戦略(2016/17年 - 2019/20年)の柱の一つ*1の達成の大きな成果となりました。

*1: 重点領域3：インフラー主要成果10：持続可能で安全で、環境に配慮した輸送ネットワークの提供

(3)太平洋気候変動センター

（贈与契約締結2017年2月、供与額9.62億円）

気候変動に伴う自然災害の頻発・激甚化に対し、太平洋州地域に散在する島しょ国では、気候変動・防災対策に資する域内拠点の整備と、関連人材の育成が課題となっています。大洋州地域環境計画期間事務局（SPREP）に研修施設となる太平洋気候変動センターを整備し、同事務局の気候変動業務の強化、太平洋地域における各国の人材育成を図っています。

完成した太平洋気候変動センター

太平洋気候変動センター建設計画　工事の様子

国立大学職業訓練拡充（2004―2006年）

ヴァイシガノ橋架け替え計画（2017―2020年）

都市水道改善計画（2013―2016年）

無償資金協力の主な実績

年度	件　　名	供与額 億円
1977	漁業訓練船	1.50
1978	水産センター建設計画	4.00
1978	栄養改善計画	2.00
1979	食糧増産援助（2KR）	3.00
1980	移動図書館車（文化無償）	0.14
1980	栄養改善計画	1.00
1980	教育振興計画	2.00
1980	漁港整備計画	6.00
1981	教育振興計画	1.10
1981	体育機材（文化無償）	0.15
1981	栄養改善計画	1.00
1981	食糧増産援助（2KR）	2.00
1982	診療所建設計画	5.70
1982	理科実験機材（文化無償）	0.20
1983	食糧増産援助（2KR）	2.00
1984	国内輸送力増強計画（第1期）	3.90
1985	国内輸送力増強計画（第2期）	4.33
1985	視聴覚機材（文化無償）	0.35
1985	ファレオロ国際空港ターミナル建設計画（第1期）	6.63
1986	ファレオロ国際空港ターミナル建設計画（第2期）	4.49
1986	食糧増産援助（2KR）	2.00
1986	音楽機材（文化無償）	0.18
1987	フェリーボート建造計画	6.73
1988	アピア港整備計画（第1期）	6.90
1989	アピア港整備計画（第2期）	9.13
1990	港湾災害復旧計画（第1期）	4.90
1990	食糧増産援助（2KR）	1.84
1991	港湾災害復旧計画（第2期）	6.87
1991	食糧増産援助（2KR）	1.50
1991	災害緊急援助	0.13
1992	地方電化計画（第1期）	5.34

年度	件　　名	供与額 億円
1992	港湾・護岸災害復旧計画（第1期）	9.16
1993	地方電化計画（第2期）	4.45
1993	ツアシビ病院再建計画	6.24
1993	港湾・護岸災害復旧計画（第2期）	6.80
1994	地方電話整備計画（第1期）	2.34
1994	食糧増産援助（2KR）	2.00
1995	サモア国立大学拡充計画（第1期）	6.67
1995	地方電話整備計画（第2期）	4.06
1996	サモア国立大学拡充計画（第2期）	10.55
1997	島嶼間フェリーボート建造	14.43
1997	サモア国立大学理科実験機材（文化無償）	0.36
1997	食糧増産援助（2KR）	2.50
1998	南太平洋大学（USP）通信体系改善計画	0.67
1999	教育省印刷機材	0.46
2000	SPREP教育訓練センター	3.68
2000	アピア港タグボート整備計画	3.98
2001	アピア港整備計画（第1期～4期）	22.94
2004	アピア漁港整備計画（水産無償）	7.09
2004	国立大学職業訓練拡充計画（第1期）	9.02
2005	国立大学職業訓練拡充計画（第2期）	7.23
2005	ノン・プロジェクト無償	1.00
2008	島嶼間フェリーボート建造	13.00
2009	気象観測/災害対策向上計画	7.45
2010	気候変動/森林保全	3.00
2011	貧困削減戦略支援	1.00
2013	ノン・プロジェクト無償	1.00
2013	都市水道改善計画	18.31
2015	アピア港安全向上計画	34.77
2016	ノン・プロジェクト無償	2.00
2016	太平洋気候変動センター建設計画	9.62
2017	ヴァイシガノ橋架け替え計画	18.06

有償資金協力

多くの開発途上国では、電力、運輸交通、通信などの経済社会基盤の整備が不十分です。円借款は、開発途上国に対して低利で長期の緩やかな条件で開発資金を貸し付けることにより、開発途上国の社会基盤整備を進め、持続的な経済発展への取組みを支援しています。開発途上国に借入資金の効率的な利用と適切な事業監理を促し、開発途上国のオーナーシップを後押しします。サモアにおいては、円借款事業として「電力セクター拡張事業」を実施しました（EN署名日：2007年12月10日、貸付承諾額：45.98億円）。本事業はADB・豪州政府と協調して実施し、サモア国内の発電所の建設・改修、送配電網の整備・改修等を行うことにより、電力の安定供給を図りました。本案件実施により、サモア電力公社による電力供給基盤が強化され、それにより電力供給の安定性の向上にもつながり、民間セクター開発のみならず一般世帯の生活向上へのインパクトが出ています。

ディーゼル発電機

Mr. Fonoti Perelini S.
元サモア電力公社職員
元プロジェクトマネジャー

有償資金協力パートナーの声：サモア電力公社

JICAは、サモア政府、アジア開発銀行、オーストラリア政府と共同し、2007年から2018年に渡る、電力セクター拡張事業を通じて、一般世帯の生活向上、経済発展に多大な貢献をしました。具体的には、ディーゼル発電所の建設や既存ディーゼル発電所を改修し、今後ますます増加が見込まれるエネルギー消費に耐えうる発電システムの整備を成し遂げました。また、送配電網、通信システム等のインフラ整備、90%の家庭への前払いメーター方式の導入、低所得者層向けの税金優遇制度の導入等、成果は多岐に渡ります。

さらには、現在、電力供給の安定化とディーゼル発電への依存を減らすための太陽光・風力・水力・バイオマスガスといった再生可能エネルギーの導入に向けた取り組みも開始しています。

貨物船2隻が停泊可能となったアピア港

ヴァイシガノ橋

帰国研修生同窓会

サモア帰国研修員同窓会（Samoa JICA Alumni Association（SJAA））はJICAが実施する本邦及び第三国研修に参加し、帰国後の研修員間及びJICA人材等との連携・交流促進を図るため1998年に設立されました。政府官公庁職員を中心にNGO等、これまでに1,000名を超える帰国研修員で成り立っており、国家的行事への参加、研修員配属機関を通じた開発貢献、社会奉仕、帰国研修員間のネットワーク構築のための活動などを毎年積極的に行っています。これら活動は支所スタッフのみならずボランティアや専門家等日本人関係者と帰国研修員とのネットワーク強化にも寄与しています。

SJAAは2017年度に法人として政府に正式登録され、2018年にはサモア国首相を主賓に迎え設立20周年記念式典を開催しました。サモア独立記念日行事への参加、自然資源環境省主催の植林活動やゴミ拾い活動などの年次行事に加え、2021年度は現地高校生を対象にしたキャリアデイ（職業説明会）の開催など、多業種の会員を有する同窓会ならではのバラエティに富んだ活動を実施しました。

サモア支所は活動費支援や役員会へのアドバイスを通じて活性化を図っています。今後さらに入会者が増え、研修で培った技術・知識のサモア社会への普及還元及び日本とサモアの相互理解・文化交流の場としてより活用されるよう、更なる連携を目指しています。

老人養護施設での清掃活動風景

キャリアデイ（職業説明会）参加者

事業略歴

年度	出来事
1998	帰国研修員同窓会設立
2017	法人として政府に公式登録
2018	設立20周年記念式典行事実施

青年海外協力隊サモアOB会

青年海外協力隊サモアOB会(以下、サモアOB会)は、1994年にサモア帰国隊員を中心に、隊員間の親睦、サモアでの協力隊経験を社会に還元する活動を促進するために設立した団体です。会員はサモア協力隊OB・OG、シニア海外ボランティア、専門家、JICA職員などサモアに関係した人物で構成され、現在、会員数は400名を超え、協力隊OB会組織の中でも大きな団体のひとつです。

サモアOB会は、毎年、開催されているJICAボランティアフェスタにサモア隊員OB会のブースを出展し、日本とサモアの友好の懸け橋に大きく貢献しています。

2020年から世界で新型コロナウィスルの感染拡大が広がり、日常生活にリモートワークが中心となっています。このような困難な状況にも負けず、サモアOB会は隊員OBや派遣前の協力隊員に向けたオンラインイベントを開催して、積極的にサモアの情報を発信しています。

サモアOB会は「FaaSamoa(サモア風)」をスローガンに、お互いが知らない顔同士でも年齢が違っても、普段の忙しい日々や仕事を忘れてのんびりと同じ時間を共有することです。

ぜひ、サモアOB会が運営しているHPもご訪問下さい。
青年海外協力隊サモアOB会：http://www.fafetai.net/

サモアOB会オンラインミーティング

事業略歴

年	出来事
1994	青年海外協力隊サモアOB会 設立
2005	トゥイラエパ首相来日歓迎式典への出席
	愛・地球博「サモアデー」への協力
2019	ラグビーワールドカップ サモア代表チームの応援

毎年、グローバルフェスタJAPANへのサモアOB会ブースの出展、JICAボランティアフェスタへの参加を行っています。

写真で綴るJICAサモアの軌跡

レディ・サモアⅢ号

タパタパオ浄水場

サモア国立大学

都市水道改善計画

サモアの思い出

N
S
LONDON
NEW YORK 12259
LOS ANGELES 8302
HONOLULU 4196
TOKYO
SYDNEY 4396
AUCKLAND 2892
TONGA 890
BERLIN

RSA
WESTERN SAMOA
ESTABLISHED 1946
THIS BUILDING WAS PRESENTED TO THE
RETURNED SERVICES ASSOCIATION
OF WESTERN SAMOA INCORPORATED
BY THE FIRM OF
O.F. NELSON & Co LTD
IN MEMORY OF THE
LATE O.F. NELSON M.L.C.

Message from our Staff

JICAサモア支所スタッフ

フイオノ 洋子　総務、経理

私は日本国籍を持つ現地職員として、主に総務、経理、調達業務を担当しております。「洋子」という名前は「太平洋のように広い心をもつ人になるように」という両親の願いを込めてつけられました。そのような寛容な人物になれたかどうかは極めて疑わしいところですが、それは「なぜ日本からはるか遠いサモアに導かれたのか」、「なぜサモアの美しい日常の風景は飽きることなく魅了するのか」ということとどこかで繋がっている気がしています。私のJICA歴はサモア在留歴とほぼ等しく、共に人生のかなりの部分を占めつつありますので、JICA海外協力隊派遣50周年記念という大きな節目に立ち会えることを大変光栄に思います。そしてこれまで共に働きサポート頂いた全ての皆様に感謝致します。

Ms. Runamarie Sesega　総務、経理

タロファラヴァ(こんにちは)！50周年記念おめでとうございます！私はJICAサモア事務所で勤務することができ、心から感謝しています。過去10年間、JICAは無償資金協力、技術協力プログラムを通じて、サモアの発展に多大な貢献をしているのを目の当たりにしてきました。またJICA海外協力隊の貢献も、サモアの人々から高く評価されています。協力隊員のサモアの人々に対する熱心な支援活動は、サモアの成長、サモアと日本の強い絆を一層深め、まさに「GalulueFaatasi」(WorkingTogether)そのものです。JICA海外協力隊サモア派遣50周年を祝福します！ドウモアリガトウゴザイマス！

Mr. Emanuele Taupau　プログラムコーディネーター

JICA海外協力隊の方々と一緒にお仕事出来ることを嬉しく思っています。サモアへのJICA海外協力隊派遣50周年を記念し、50年間の協力隊員の努力により築き上げた貢献の歴史を、皆さんに再度認識されることを願っています。協力隊員の皆さん、ファフェタイ・ラバ！皆さんの素晴らしい寛大さと献身に感謝しています。皆さんの貢献なくして、サモアの成功はなかったでしょう。私はプロジェクト部門で5年以上JICAサモアオフィスで働いており、現在は、主要プロジェクトを管理しています。バレーボールが好きで、家族と一緒に過ごすことが私の楽しみです。

Ms. Rebecca Nun Yan　プログラムコーディネーター

50周年おめでとうございます！この歴史的な50周年記念に、サモア支所の一員として関われることを嬉しく思います。JICA海外協力隊の支援を受けているサモアは、とても恵まれています。協力隊員は、教育、スポーツ、医療、障害者支援、環境保護など、幅広い分野でサモアが必要とする支援を提供してくれています。貴重の時間、才能をサモアのために捧げてくれた協力隊員に感謝します。皆さんの素晴らしい貢献に拍手喝采！アリガトウゴザイマス！

JICAサモア支所関連スタッフ

Mr. Mathew Ringo PURCELL　安全対策クラーク

JICAサモアの50年間の活動、おめでとうございます。JICAによる支援が50年の節目に到達したことは、サモアにとっても喜ばしいことです。JICAは、教育、学校建設、橋や道路などのインフラ建設など、多岐にわたる手法でサモアへ貢献しています。皆さんに感謝申し上げます。

Ms. Meinatta Crichton　ボランティアコーディネーター

タロファラヴァ(こんにちは)！私は2001年から、JICAサモア事務所でボランティア事業に従事しています。これまでに、300人以上のJICA海外協力隊員に出会いました。正確には322人ですね。協力隊員と一緒に仕事をすることは、私の最大の喜びでした。協力隊員の皆さんがサモアへ到着する準備からはじまり、安全な住居を見つけ、職場や業務の評価やモニタリング、サモアでの生活を安全で健康に送れるようにお手伝いをしています。サモアに対するJICA海外協力隊の貢献は計り知れません。協力隊員の方々がサモアで過ごす2年間で、人生を変えるほどの経験をし、ファアサモア(サモアンウェイ)とは何かを習得した姿を目にしてきました。JICA海外協力隊サモア派遣50周年おめでとうございます！

Mr. Larry Sang Yum　ドライバー

私は5年以上JICAサモア事務所に勤めていますが、JICA海外協力隊による子供たちへの教育支援により、サモアの経済が成長してきたことを見てきました。JICA海外協力隊のおかげで、サモアの多くの組織は発展してきました。協力隊員のサモアでの50年間の貢献に感謝しています。私はサッカーや、私の小さな子供たちの世話をすることが好きです。50周年記念おめでとうございます。

Ms. Charity Malaga　広報

私は最近、JICAサモアのチームに加わりましたが、毎日が楽しく、冒険のようにあっという間に過ぎています。サモア帰国研修員同窓会主催のキャリアデー、日本の中学生とサモアの小学生の異文化交流イベントでの満面の笑顔、SDGsグローバルリーダーシッププログラム受賞セレモニー等、本当に素晴らしい経験でした。JICAは、協力し合い、理解し合うこと以外には何も見返りを求めない、私たちが必要なときにはいつも現れる友人みたいです。協力隊派遣50周年おめでとうございます！

堀之内 未佳　健康管理員

私は、このJICA海外協力隊サモア派遣50周年という記念すべき年に、初めて健康管理員としてサモアへ派遣されました。サモアでのボランティア活動について学んでいくと、本当に多くの現地の方々に支えられ、ここまで続けてこられたということを実感いたします。これまでにご協力いただいた現地関係者の皆様、本当にありがとうございました。そして今後、さらに50年、100年と、共に歩んでいけることを願っています。

JICAサモア支所スタッフ

編集後記

星野 明彦　支所長

協力隊派遣による日本人とサモア人との協力が50年間絶えることなく続いてきたことに感動を覚えています。この信頼に基づいた協力の成果が一層サモアの国の隅々にまで行き亘るよう、更なる50年に向けて、心を引き締めて頑張りたいと思います。ファフェタイ・ラバ!

岩田 章一　企画調査員（企画）

協力隊サモア派遣50周年を記念する年に、サモア支所の一員として関われることを嬉しく思います。歴代50年間に渡りサモアに関わった先人の方々の努力と良好な交流に感謝します。そして、1日でも早くサモアが援助を受ける国を卒業し、援助を行える国になることを願っています。サモアでほぼ毎日目にする虹。個人的に虹の国と名付けサモアの良さを発信していきたいと思っています。

鶴田 宏幸　企画調査員（ボランティア）

2020年3月、世界的な新型コロナ感染拡大に伴い、サモアの海外協力隊員も日本に退避となりました。本紙を編さんしている2021年9月時点においても、隊員のサモア再渡航の目途は立っていませんが、本誌がこれまでのサモア協力隊員とサモアのカウンターパートの功績、そして未来の協力と連携に向けた一助になればと願いながら取り組みました。末文になりますが、この場を借りて、本誌作成にご協力いただいた皆様に御礼申し上げます。

山口 真司　企画調査員（ボランティア）

50周年記念誌の刊行、本誌の編集に関わることができ、大変嬉しく思います。本誌のために提供いただいた写真やメッセージを拝見して、50年に渡るJICAとサモアの取り組みを知りました。着任間もない時期に本誌の編集に関わりましたが、これから私自身もサモアでJICAボランティア事業に微力ながら関われることを大変光栄に思います。最後になりましたが、写真、原稿執筆依頼に快く応じていただきました皆様方に心よりお礼申し上げます。

SPECIAL THANKS

執筆、写真提供

Ms. Sharon Suhren　Aoga Fiamalamalama
Mr. Semi Lesa　Samoa Water Authority
Ms. Da Young Mary Magdalene Tuuau　Electric Power Corporation
Ms. Galumalemana Ta'atialeoitiiti Agnes Tutuvanu　Land Transport Authority
Mr. Sooalo Kuresa Sooalo　Samoa Ports Authority
Mr. Fonoti Perelini S.
一盛和世

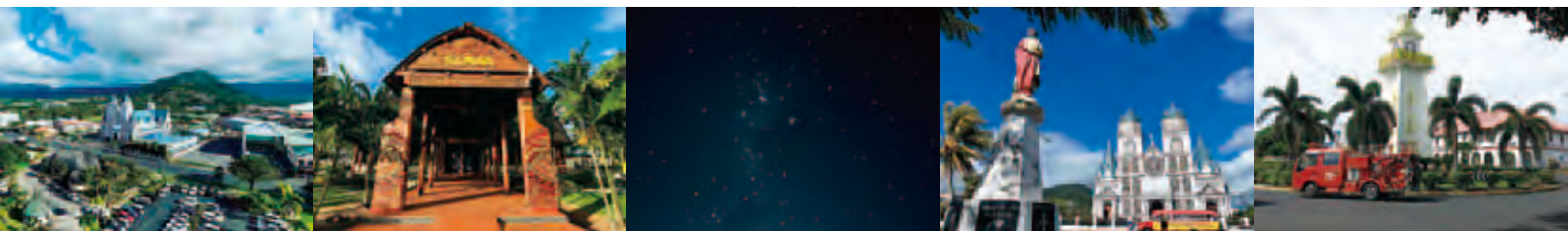
写真提供

田中智子　坂本賢二　山口大和　元栄由紀子　宮﨑　博
根本千尋　氏原　岬（旧姓：藤原）　林　孝一　松村剛志
新井教之　笹島美沙希　池下昌弘　原　奈央　中井彰彦
江口吹樹　上林航平　柏山　麗　岩田章一
フイオノ洋子　青年海外協力隊サモアOB会

参考文献・ウェブサイト

「JICAウェブサイト　事業・プロジェクト」

旧JICAサモアオフィス（2013年以前）

現JICAサモアオフィス（2013年以降）

JICA海外協力隊サモア派遣50周年
JICAサモア事業の歩み
2022年2月発行
編集・発行　独立行政法人国際協力機構（JICA）サモア支所
ホームページ　https://www.jica.go.jp/samoa/
Facebook　https://www.facebook.com/jicasamoa